

バッティング練習

一宮西部小・6 山口 航聖

「よっしゃー。」

ぼくのチームが県大会に出場できる大会を優勝した。ぼくはうれしくて思わずガッツポーズをってしまった。

「パチパチパチ」

グラウンドにはく手の音がひびわたった。その日は、県大会という三文字が頭からはなれなかった。それから思い出す度ワクワクしていた。

そして、県大会まで二週間になったころ、ソファにすわっているぼくにお父さんが言った。

「県大会までもう少しあるからヒットやホームランを打てるように練習しよう。」

もちろんぼくはお父さんの提案にのった。ぼくはどんな練習か気になっていった。ぼくはお父さんに聞いてみると、それはボールを毎日百球打つことだった。ぼくは正直できるか不安になっていた。

「でも県大会のためにがんばるぞ。」

と、ぼくは心にちかった。練習はその日の夜から始まった。

「カキーン、カキーン」

何球か打つと、お父さんからアドバイスをもらった。言われたことを意識して打つときつきよりも良い打球がとんだ。

「これなら県大会でも打てるぞ。」

ぼくは少し自信がついた。六十球をこえてくると段々ときつくなってきた。うでに力がぜんぜん入らない。

「くそ、こんなところで、あきらめたら、県大会なんかじゃ打てない。」

そう思いやる気を出した。そうして練習を始めてから一週間になった。つらいと思うことはすごく減って、なれてきた。一週間前より体力がついたという事だ。スイングもこしが回って強くなったと思う。ぼくはうれしかった。早く県大会で試したくなった。そして、ついに県大会当日になった。朝から、ドキドキ、と耳の中でひびいている。試合前の練習の時間になった。

「ぼくのバッティングは県大会で通用するのだろうか。」

そんな事を、ずっと考えてしまう。練習が終わってから三時間後、ようやく試合が始まった。ぼくのチームは先攻になった。ぼくの打順は、二番。一番の子はアウトになって、ワンアウトランナー無しでぼくの打順が回ってきた。ピッチャーの球は速かった。でも打てないとは、感じなかった。二週間練習してきたからか、自信がわいてきた。そしてピッチャーが一球目を投げた。ぼくは、ストライクだと思い、思いっきりバットをふった。

「カキーン」

バットにボールが当たってレフト方向に飛んでいった。

「よしっ。当たった。」

でも、ボールの落下地点にレフトがいて、ただのレフトフライになってしまった。確かに打つタイミングが速すぎて、当たった場所がバットの先っぽだった。

「くそ。」

思わず声に出してしまった。そして、こうげきが終わり守りについた。ぼくは、ピッチャーだった。一回裏は三人でおさえた。そして二回表。おしい所までせめたが無得点でおさえられてしまった。二回裏、ぼくたちは大量得点を取られてしまった。そして三回表、ぼくからのこうげきだ。ぼくは、ストライクは、ふったが、ファールになつてしまい、結局フォアボールになった。一るいに向かっているとちゆう少しポーツとしているように感じた。そして次のバッターがヒットを打って、ノーアウト二、三るいになった。だが、この後の三人がアウトになつてしまい、また無得点でおさえられてしまった。ベンチにもどる時、ぼくはおなかが気持ち悪かった。そういえば、一るいに行く時、頭が回っていないかった。三回裏からは、体調不良で交代してもらい、ぼくはきゆうけいしていた。そして、数十分後に試合が終わった。ボロ負けだった。試合が終わってからは、くやしいとしか思わなかった。野球でこんなにくやしいと思つたことはなかった。

「もう一回やりなおしたい。」

そう思った。これまで以上に野球への思いが高まった。

「県大会では打てなかったけど、これからはぜったいに打つ。」

という気持ちが増えた。県大会は、ただ試合をする大会、じゃなくて、ぼくみたいな人の気持ちを変えられる大会なのが分かった。